古代文字資料館発行『KOTONOHA』136 号（2014 年 3 月）

東アジアの古文字と解読について

吉池孝一

一

東アジアには解読を必要とした文字および現に解読中の文字がある。遠くは殷の甲骨文字、近くは遼の契丹大字と契丹小字、西夏の西夏文字、金の女真文字がある。ばあいによっては元のパスパ文字も加えてよいかもしれない。突厥文字は、モンゴル、シベリア、バルカン半島に至る広範な地域から見つかっているが、これも東アジアの文字に含めることにする。これら東アジアの古文字について、解読という点からみたばあい、共通項は漢字漢語との係わりを持つということであろう。

二

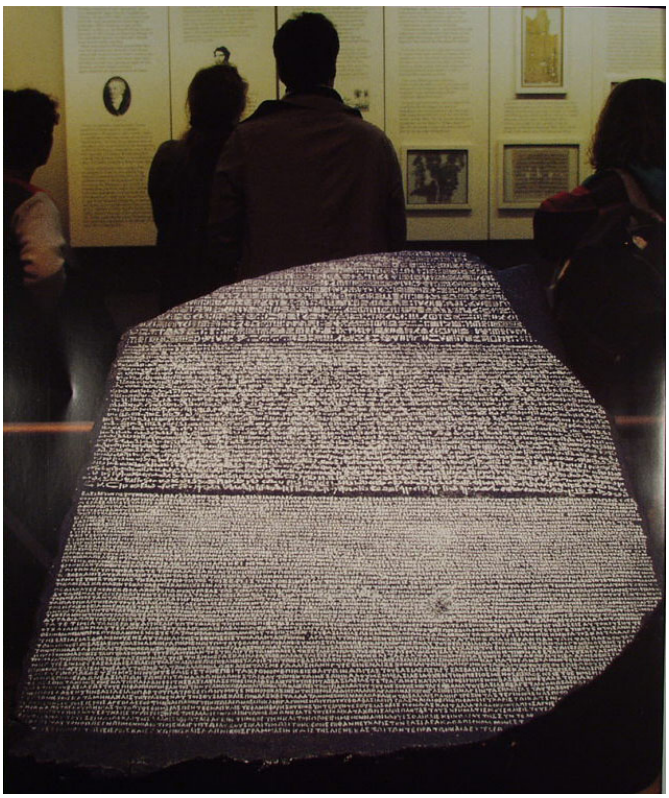
さて未解読文字という表現があるけれども、これは矛盾を含んでいる。“文字”は言語を表記した記号(言語との対応については精粗さまざまなレベルがあるとしても)である。そうであるならば、ある程度解読が進み、対象となる記号が言語に対応していることが分かって、それではじめて文字を対象とした解読作業とすることができる。たとえば、未解読のいわゆる“ファイストスの円盤”という断片的な資料があるけれども、言語に対応していることが判明した後に“文字”と認定されるわけで、それまでは未解読記号といわざるをえない。未解読記号は、解読の進展にともない文字であることが判明する。とくに、記号が断片的に綴られている場合は、それが文字といえるものであるか否かが問題となるため、解読の当初は未解読記号といわざるを得ない。未解読のいわゆる“インダス文字”も“インダス記号”と呼ぶべきかもしれない。もっとも長く綴られた記号が多量にあるばあいや、既知の文字と合壁となっているばあいなどは、未解読であっても、常識的な観点より文字と想定して大過ないものもあり、そのような場合は未解読文字と称しても実害はない。

三

“未解読文字”を解読するために必要とされる条件は何か。ウィーラー(1966:177)によると、解読には①二言語が対応した資料もしくは②重要な繰り返しの記事のある長い銘文が必要であるという。ひとくちに、二言語が対応した資料といっても実際にはさまざまなレベルのものがある。内容において全面的に対応したものから部分的に対応したものまでさまざまである。また、直接に対応した既知の言語資料はないが、未解読文字にみられる繰り返し現れる記事に対して間接的に既知の言語を当てはめて解読の突破口とすることもある。エジプト象形文字の解読の場合、内容が対応したギリシア文字ギリシア語が刻されたロゼッタ石(下の写真参照)が突破口となったようである[1]。突厥文字の場合も内容が対応した漢

[1] ﾚｽﾘｰ・ｱﾄﾞｷﾝｽﾞ/ﾛｲ・ｱﾄﾞｷﾝｽﾞ(2002)参照。同書によると解読に利用できた部分はプトレマイオスという王名の対応くらいであるという。ロゼッタ石という対音対訳資料が果たした最大の役割

字漢文が刻されたオルホン碑文が利用された。殷(即ち商)の甲骨文字の場合、直接に対応した文字資料はないが、後代の同系文字である漢字との比較によって短日月の間に読み解くことができた。後代の漢字が甲骨文字と同系であるという理解および甲骨文字が殷代の占いを記録した文字であるとの理解が解読の鍵となったわけである。「後代の同系文字」がロゼッタ石の役目を果たしたともいえよう。あるいは、中国の著名な文字学者である唐蘭が述べたように、ロゼッタ石以上の信頼性があったということかもしれない[2]。いずれにしても未解読の記号の羅列が目の前にあったとして、まずは記号の羅列の中から“語”を想定する作業をすすめ、最終的には文の意味を理解することが目的となる。この解読の目的を達成するためには、直接であれまた間接であれ既知の対音対訳資料は不可欠である。



←エジプト象形文字(神官文字)

←エジプト象形文字(民衆文字)

←ギリシア文字

ロゼッタ石[3]

四

遼の契丹大小字、西夏の西夏文字、金の女真文字のばあいは、いずれも漢字漢語がロゼッタ石のギリシア文字ギリシア語の役目をはたしている。さらには、契丹大小字、西夏文字、女真文字は、その文字組織において漢字から影響を受けており漢字との比較対照は欠

は、ギリシア文字ギリシア語の単語数に比べて対応するエジプト象形文字の記号の数が格段に少ないことより、解読の対象が表意文字主体の文字ではなく、表音文字主体の文字であることを発見する契機となったことにあるという。

[2] 唐 蘭(1963) の下編 16 葉参照。

[3] 『週刊世界の美術館　大英博物館 I 』(講談社,2000 年)による。

かせない。元のパスパ文字資料に解読が必要であったのかどうか難しいところであるが[4]、この文字資料を扱った初期の状況が明らかになるまでは解読が必要な文字としておくこととする。

・	・	・	・・・	・
エ	甲	突	契西女	パ
ジ象	骨	厥	丹夏真	ス
プ形	文	文	大文文	パ
ト文	字	字	小字字	文
字			字	字
ギリシア文字ギリシア語		漢字漢語		

東西の二言語対応

五

以上を要するに、解読が必要であった東アジアの古文字は、いずれも漢字漢語という対音対訳資料を持っており、それが解読のかなめとなっているということである。そのうち、契丹大小字、西夏文字、女真文字は、文字組織のいずれかにおいて漢字より影響を受けており、漢字漢語とは二重の係わりを持つという点において一つのまとまりをなしている。なお、甲骨文字と突厥文字は措くとして、契丹大小字・西夏文字・女真文字・パスパ文字の解読にあっては、遼・西夏・金・元代の北方漢語音の知識が必要となるのであるが、具体的な作業にあっては元代の曲韻書である『中原音韻』(1324 年)より帰納した音系を中心に据えることになろう。もっとも、表音文字主体の契丹小字資料の初出は 1053 年であり、西夏国の位置は中国の西北である。『中原音韻』(1324 年)とは時代と地域を異にするものを含むけれども、さしあたっては 10 世紀から 14 世紀の北方周辺民族に係わる漢語を大きな一つのまとまりとして捉えて作業をし、問題の生ずるところは調整するということになる。

六

なお未解読文字が表意文字であるばあい字音の再現は容易でない。甲骨文字の字音の再現は不

[4] パスパ文字で記された漢語を読み解く場合、パスパ文字と漢字が対応した『蒙古字韻』さえあれば事足りており、中国にあっては『蒙古字韻』を利用してパスパ文字漢語は読まれていたことがわかっている。またパスパ文字と漢字が合壁となった碑文も多数あり『蒙古字韻』がなかったとしてもパスパ文字漢語文の読み解きは容易である。パスパ文字蒙古語資料を読み解くばあいには、個々のパスパ文字の音価が解りさえすればよい。パスパ文字がチベット文字の変形したものであることは一目瞭然であるからチベット文字の音価を当てはめれば大過なく音価を得ることができるし、パスパ文字の字母を漢字音を利用して注記したものがあり、音価の推定は可能である。先の甲骨文字の場合は後代の漢字と同系でありその字義を参照することができたのであるが、パスパ文字の場合はチベット文字と同系でありその字音を参照することができたというわけである。パスパ文字資料を読み解く場合には、手続きの発見によって劇的に解読が進んだというような状況は想定しにくい。

可能であるようにも思える。漢字で表記された上古漢語のばあい、中古漢語と同系の言語であろうという想定のもと、押韻や声符や仮借などの状況により漢字の字音を再構成することができるわけであり、比較的に資料に恵まれている。甲骨文字のばあい、文字自体は後代の漢字の祖先であることは間違いないが、甲骨文字によって書かれている言語の系統は定かでない。声符及び仮借と考えられるものは僅かにあるが、言語音の再構成に使用できるほどの量はなさそうである。押韻の資料も望めない。我々は、甲骨文字と後代の漢字の字形を対応させ、その意味を推定し、甲骨文という文脈のなかにその意味を当てはめ、修正をしながら読み解くことになる。そのばあい我々は甲骨文を訓読するのである。あるばあいは漢語で甲骨文を訓読し、またあるばあいは日本語で甲骨文を訓読し、それによって文意をとるにすぎない。他方、表意文字である西夏文字のばあい、漢字音による音注資料や西夏語音を体系的に表記した韻書や韻図が存在したことにより、その字音も再構成されている。このような幸運をもった未解読文字は多くはない。

〈参考文献(発行年順)〉

唐　蘭(1935)『古文字学導論』(1935 年自序)。『増訂本 古文字学導論』(済南:斉魯書社、1981 年)所収による。

ウィーラー著 曾野寿彦訳(1966)『インダス文明』東京：みすず書房。

清水満郎(2000)『週刊世界の美術館　大英博物館Ⅰ』東京：講談社。

ﾚｽﾘｰ・ｱﾄﾞｷﾝｽﾞ/ﾛｲ・ｱﾄﾞｷﾝｽﾞ著 木原武一訳(2002)『ロゼッタストーン解読』東京：新潮社。

大竹昌巳(2013)「文字の体系と文字解読の原理」『KOTONOHA』131:1-11。